

[126頁の追加]

告別（最後）の説教 第3部（17.1-26）

本章は「祭司的祈り」であり、最後の説教の荘厳な結論といえよう。ここで、栄光を受けた大祭司イエスは、御父の許へ帰り、人類の代表として一致を求める荘厳な祈りをささげる。典礼的には、歴史的であり、永遠に有効な十字架の奉献の序章になる。（「主の祈り」と共鳴している。）

すべてが成し遂げられる、栄光を求める祈り（17.1-8）

今や、大祭司イエスは、栄光が生み出す永遠のいのちの源でありえる。こうして、人々は御父を「知る」からである。（「知る」とはセム語的用法では、親密さと一致とを意味する。）

イエスを受け入れる人々は、すでに御父によって選ばれた人々である。

弟子たちのための祈り（17.9-19）

イエスは、彼らの保護（9-16節）と奉献（17-19節）を求めて祈る。

弟子たちは、キリストの代わりに世を征服するために、世に対して正面から攻撃するように派遣される。

イエス自身の奉献から弟子たちが必要な献身と聖化される恵みをいただくために、自らをいけにえとして神にささげたのである。したがって、聖霊の派遣の約束になっている。

弟子たちの言葉によって信じる人々のための祈り（17.20-26）

キリスト者におけるイエスの内在は、御父とすべての時代のキリスト者とを結ぶ一致の大切な絆である。